





2013.3.26(火)

第3種郵便物認可

# 茶の間にいこて

《3》

おのづながり求めて

## 心地よい場、共有



「うちの実家」でオセロゲームに興じる大関カツ子さん（右）。リハビリも兼ねている＝新潟市東区

## 対等な立場で助け合う

地域の茶の間は、介護

サービスは年々充実し、社会を支える仕組みづくりが進んできている。一方で「無

いがい別々のことをして時からお嫁に来た人、仕事の「実家」には老若男女、さまざまな人が来る。そして「実家」には「孤独死」という言葉で表される暮らしの

状況がある。地域で互いに手を貸し合える関係性はますます希薄になっている。

「実家の利用者にも、独り暮らしの人がいれば、アパート住まいでも隣近所とは疎遠な人もいる。

地域の茶の間は、介護度を主目的に始まったところも多いが、河田さんは「これからは役割が変わっていくと思う」と話す。高齢者が自分でなくさまざまな人が来、対等なつながりを持てる場へ。「お金を払つて受けられる制度やサービスは大切。でも、より身近で気軽に助け合える関係はこれからもっと必要になつ

「実家」には幼い子どもを連れた母親も時々顔を出します。初めは母親のそばを離れない子どもも、数十分も木やブロックと一緒に遊ぶようになる。母親はひとと木見から離れ、おしゃべりに夢中になれる。見守る人、海外へ

がその場で出来上がる。「街ですれ違つても、知り合わなければ相手がどんな手助けが必要とするのか分からぬ。ここでは誰をも排除しない。互いの自由を知り、距離感を学ぶ場でもあるんです」と話す「実家の代表、河田桂子さん

(69)。介護職を務め、親の世話をした経験から、介護や育児を一人で背負い込むことの大変さは身に染みて

いる。それを「実家の利用者には、『実家』のサービスを施す人、施され

ることには、心地よい“場”を共有する人々がいるだけ

緑の盤に並ぶ白と黒の石をにらむ2人。大関カツ子さん(74)は「このひとつよいんだ」とゆつくり言葉をつなながら、石をひっくり返す。対戦相手は天ひとママだ。

カツ子さんは5代の時に

「うちの実家」と応じる。「うちの実家」は新潟市東区で、午後のカツ子さんは5代の時に

大関カツ子さんは5代の時に

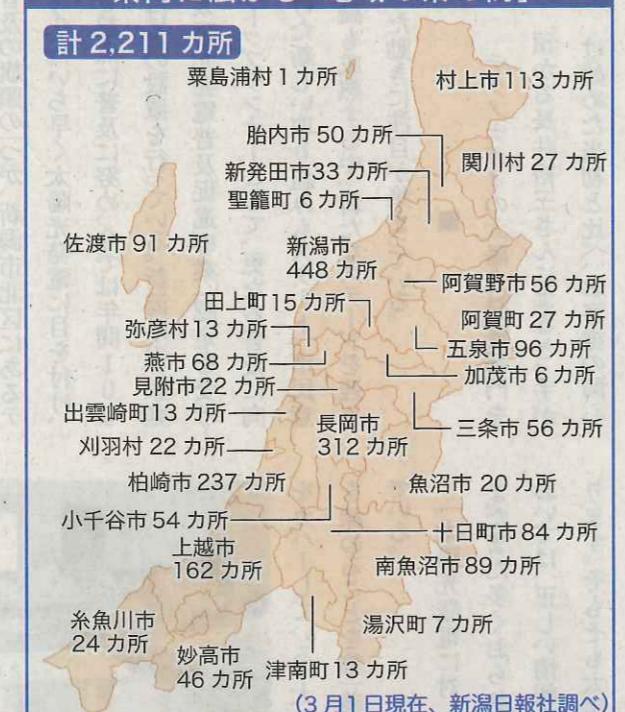
大関カツ子さんは5代の時に

運営者が交流  
進む情報交換

高齢者を中心とした居場所は、「地域の茶の間」以外に「サロン」や「ミニユーティーカフェ」などさまざまな名称で開設されている。新潟日報の調べでは3月1日現在、県内には少なくとも2211カ所があり、図

### 県内に広がる「地域の茶の間」

計 2,211 力所



(3月1日現在、新潟日報社調べ)



県内で地域の茶の間を開く関係者が情報交換をし  
た交流会=18日、新潟市中央区

入って来やすいように玄関を開け放しにしている。主宰するのは、この家で暮らす小林優子さん(65)、哲也さん(65)夫妻。自宅の開放を始めて4年になる。「考え方はうちの実家と一

“集う場” 県内2200カ所

入って来やすいように玄関を開け放しにしている。主宰するのは、この家で暮らす小林優子さん(65)、哲也さん(65)夫妻。自宅の開放を始めて4年になる。

の間に、いこて

地域のつながり求めて

# 増える居場所



自宅である「てつ家」に近所の高齢者らを迎える小林優子さん（左）と哲也さん（中央）夫婦＝新潟市西区

支え合ひを当たり前に

宅を使つたり、団体が公民館を借りたり、県内でもあちこちで地域の茶の間は開かれている。

講演に出掛けたり、うちの実家で積極的に研修を受け入れたりして普及を進めてきた河田さん。「いろいろ

「地域でさりげなく助け合えるようになれば、『茶の間』はいらなくなるのかかもしれない。そんな地域になればいいなど、願っています」。河田さんは穏やかな表情を浮かべた。迎えた新しい未来への一步を刻んだ「うちの実家」は、29日で閉鎖される。

汁を作っていることなどを紹介した。胎内市の南波正夫さん(67)は「茶の間を始めたばかりで、ほかの場所の開催時間や内容が参考になり、自分たちのところに取り入れた

によ  
足約3  
地元  
つ。  
が、よりよい居場所にな  
るよう情報交換する場も  
ある。18日には新潟市中  
央区の新潟テルサで、県  
主催の「地域の茶の間交  
流会」が開かれた。県内  
さまざま  
昌する  
で茶の間を開く人々や社  
の関係者ら約130人が  
参加。少人数のグループ  
に分かれ、運営状況や  
り事などを話し合った。  
ある団体は補助金で堅  
菜を購入し、昼食のみ

県高齢福祉保健課の小林敬課長は「茶の間の運営には住民の自主性が欠かせない。今後は組織の育成とネットワーク化に取り組んでいきたい」と話している。

新潟市西区立仮の住宅街にある民家で毎月1回開かれている「地域の茶の間」がある。「うちの実家分家」の通り、「うちの実家」は、同市東区に在り、誰でも

緒。緩やかな横のつながりを大事にしている」と優子さん。「本家」の代表、河田珪子さん(69)と有償の助け合いの事業で一緒に働いた20年来的間柄だ。河田さんは、自 分でも茶の間を開きたいと考えていた。退職が契機になつた。

外からも高齢者や障害者ら 20人前後が訪れる。畳に座る人。椅子に腰掛ける人。お茶を片手におしゃべりが 始まる。傍らで折り紙をし たり、裁縫をしたり。『本 家』と同じ空気が漂う。た めに、運営に無理はない。ス テート時から自宅開放は目 1回にどどめてきた。(僕 だ、台所を使う人には少し らが苦しんだら続かない。遠慮もある。壁にべたべた 来る人の居心地が良いのが

「一番大事」と哲也さん。優子さんは「人にやつてあげるのではなく、自分が人に来てもらつてうれしいからが増えていくんだじょうが増えていいいるから、茶の間が増えていいいるんだじょうね」と頬を緩める。

小林さん夫妻のように自会に対応しきれないのでは、うちの実家がベストというわけではない。地域によって理想とする形があるはこの場をやつてている。つなず」と話す。住民主体で「茶の間」が増えてきたことを喜びながらも、単に高齢者が集まる場所が増えるだけでは、今後迎える超高齢社会に対する心構えが大切だ。

# 茶の間に別れ惜しむ

東区「うちの実家」10年に幕

2013.3.30 新潟日報



普段通りにぎやかな雰囲気のまま終わりを迎えた「うちの実家」=29日、新潟市東区

高齢者らの交流や憩いの場「地域の茶の間」の先駆けで、新潟市東区栗

山4の「うちの実家」が29日、閉鎖された。常連ら約80人が訪れ、わが家の「うちの実家は代表の河

田珠子さん(69)が2003年に、空き家だった一軒家を借りて始めた。県内外の視察や研修を含めて10年間で延べ約4万人が訪れた。「県内のあちこちに地域の茶の間が広がり、うちの実家は目的を果たした」(河田さん)

としてやめることを決めた。

最終日も通常通り午前10時~午後3時に開設。盲導犬を連れた人や近所の小学生らが次々と顔を出し、14畳の和室はすしゅべりを楽しんだり、

田珠子さんは「ここはみんなでつくり上げた温かい場。さみしさはあるけれど、今後もみんなとのつながりを大事にしたい。各地にできた地域の茶の間から気軽に助け合える関係が地域に広がってほしい」と語った。

田珠子さん(69)が2003年に、空き家だった一軒家を借りて始めた。県内外の視察や研修を含めて10年間で延べ約4万人が訪れた。「県内のあちこちに地域の茶の間が広がり、うちの実家は目的を果たした」(河田さん)

としてやめることを決めた。

河田さんは「ここはみんなでつくり上げた温かい場。さみしさはあるけれど、今後もみんなとのつながりを大事にしたい。各地にできた地域の茶の間から気軽に助け合える関係が地域に広がってほしい」と語った。